ミュージアム展示における「負の記憶」の表現と伝達について

国立歴史民俗博物館外来研究員
寺田匡宏

１．はじめにー成田での経験から

＊私は、2006 年、成田の「歴史伝承委員会」で展示プロジェクトに関わる機会を得た。この組織は 1997 年に成田空港問題シンポ・円卓会議における地域と空港の共生の課題を踏まえてできた組織である。設立の主旨：「成田空港問題について、その発生から現在に至る全過程を正確に伝えることを任務といたします。そのために、この地域の風土や歴史をも含め、成田空港問題の背景である戦後開拓や古い村々の習慣などに関わるできうる限りの資料を収集したいと考えております。」

＊展示とは 2006 年 11 月に実施した「土・くらし・空港ー「成田」の 40 年の軌跡 1966-2006」である。この展示では「負の記憶」と地域の関係について考えさせられた。この地域には、多くの負の記憶が存在している。たとえば、1971 年の第一次、第二次強制代執行と東峰事件。地域の多くの人々が逮捕され、また自殺者も出た。22 歳の青年三ノ宮文男さんの縊死は多くの人に衝撃を与えた。その死は、反対同盟の人々や支援者の心にのしかかり続けた。当時反対同盟事務局長だった石毛博道氏の述懐によれば、1986 年の東峰事件判決によってやっと「狐つき」がとれたという。それまでは、「負の記憶」が地域を覆っていたということになる。とはいえ、それで、「負の記憶」がなくなったかというとそうではなく、その解消のためには 1991 年からの成田空港問題円卓会議とシンポジウム、そしてその流れを受けた「歴史伝承部会」の発足が必要だった。

＊今回の展示では１週間で３千人以上が来場。会場で人々が息を凝らすように展示を見ていた。シンポジウム終結から 10 年経った今なお（あるいは、10 年たったからこそ）、地域において「負の記憶」をどう表現するかが、切実に求められていることを実感した。　→「負の記憶」と共同体という問題

２．災害に関するミュージアム

災害に関するミュージアムは日本にいくつかある。

（１）火山　三松正夫記念館　有珠山　昭和
　　虻田町立火山科学館　有珠山　昭和
　　磐梯山噴火記念館　磐梯山　明治
　　浅間山火山博物館　浅間山　天明
　　伊豆大島火山博物館　伊豆大島
　　立山カルデラ火山博物館　山体崩壊　安政
　　雲仙岳災害記念館　噴火　平成

（２）地震　復興記念館　関東大震災　大正
人と防災未来センター　阪神大震災　平成
特徴：科学的視点での展示と「防災」　新しいものはスペクタクル化
特徴的なものは「復興記念館」　復興とそれを総攬する天皇という図式

※このほか、海外ではインド洋津波に関してアチェ[当研究会での西尾・山本氏の報告による］やスリランカなどでミュージアムの建設が行われている。また、イタリアのジベリーナ地震（1968 年）に関しては崩壊した地域が保存されいわば「フィールドミュージアム」となっている。

※歴史の「語り」の存在

３．なぜ記憶するのかー「阪神大震災人と防災未来センター」をめぐって

・２００２年開館
- 展示施工＝トータルメディアプラン
- 展示構成　シアター→被災状況→復興→防災教育
- 開館前・開館後に批判が存在した。
- 開館前の仮称「メモリアルセンター」　開館後「防災センター」
- 「震災の記憶」が「防災」に一元化されることに対する批判。「震災の記憶」は防災のために記憶されるものなのか？
- 歴史の「語り」への違和感

４．どのように記憶するのかー「いつかの、だれかに」展をめぐって

・防災（つまり歴史の「語り」）ではない「震災の記憶」のあり方への試み
- 2005 年１月　神戸 CAP HOUSE「いつかの、だれかに」展
- 当事者以外への伝え方、宛先不明郵便としての「記憶」
- 「慶ちゃんのこと」　蘇理剛志さんによる震災で亡くなった弟さんの記憶をたどる試み
- 蘇理さんの違和感「ぼくの弟は防災のために亡くなったのではないのです。何かのために亡くなったのではないのです。ただ地震で亡くなったのです。」
- 方法：徹底的なインタビュー、故地の訪問、残された品々の撮影
  それらをテキスト５万字と写真で展示室の３方の壁面全体に展示
  それだけの物量を費やしても本人には届かないことを提示　齟齬を顕在化

５．記憶の表現と歴史の表現－過去表現のあり方の模索

・「記憶」の存在は過去の新しい表現方法を必要とする。歴史＝現在から見てある目的のために叙述されたひとつながりの過去。「記憶」＝そのような目的によってくくられることを拒絶。

・「ヨーロッパ史」におけるその事例。ホロコーストは「ヨーロッパ史」であるが、その「記憶」はヨーロッパ史という枠組みを拒絶している。

・ヨーロッパで殺害されたユダヤ人のための記念碑（Denkmal für die ermordeten Juden Europas）　ドイツ・ベルリンの併設されたミュージアム

第１室　手記

第２室　１５組の家族

第３室　６００万人分の伝記の読み上げ

６年と７ヶ月 27 日

第４室　場所の情報

- ここでは、いわゆる「歴史的」文脈を示すことが、意識的に避けられている。それにかえて、膨大な人々の「記憶」の存在を暗示（全てを展示することは不可能なのでその一部が展示されている）。それによって生じる居心地の悪さと違和感。見学者がそれを感じることによって、「歴史」が相対化される
- →それが、「記憶」が現代に展示される意味。